

北 原 牧 地 区 遺 跡
七 野 地 区 遺 跡
百 町 原 地 区 遺 跡
小 木 原 地 下 式 横 穴 群
角 上 原 地 区 遺 跡
金 剛 寺 原 遺 跡
七 又 木 地 区 遺 跡
善 田 地 区 遺 跡

昭和62年度農業基盤整備事業
に伴う遺跡調査概要報告書

昭和63年3月

宮崎県教育委員会

北 原 牧 地 区 遺 跡
七 野 地 区 遺 跡
百 町 原 地 区 遺 跡
小 木 原 地 下 式 横 穴 群
角 上 原 地 区 遺 跡
金 剛 寺 原 遺 跡
七 又 木 地 区 遺 跡
善 田 地 区 遺 跡

昭和62年度農業基盤整備事業
に伴う遺跡調査概要報告書

昭和63年3月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県内の各地では、農業の近代化等を図るため各種の農業基盤整備事業が実施されております。事業予定地内に埋蔵文化財が所在する例が多々あり、文化財の保護と農業基盤整備事業の調整が急務の課題となって来ています。県教育委員会では、事業予定地内における埋蔵文化財の所在の有無、性格、範囲等の基礎資料を得るための発掘調査を実施しています。

本年度は、北原牧地区遺跡（新富町）、七野地区遺跡（田野町）、小木原地下式横穴群（えびの市）など8ヶ所で発掘調査を実施いたしました。調査の結果、北原牧地区では、径15m前後の規模の小さい円墳でありましたが、県内では初めて二重の周溝をもつことが確認され、これは全国的にも類例は少ないと聞いております。そのため、県教育委員会では、古墳の墳辺及び周溝の現状保存が必要と考え、事業者へ協議を申し入れましたが、理解が得られ周溝部分等は現状で保存されることになりました。

本報告書は、本年度実施した8ヶ所の遺跡の発掘調査の概要ですが、これらの成果を取めた本書が、文化財の保護・活用に生かされ、また、地域の歴史研究、社会教育の場で役立てていただければ幸いに存じます。

最後に、調査にあたって御協力いただいた地元並びに関係諸機関の方々に厚く御礼を申し上げます。

昭和63年3月

宮崎県教育委員会

教育長 船 木 哲

例 言

1. 本書は、宮崎県教育委員会が国庫の補助をえて実施した昭和62年度発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、宮崎県内の農業基盤整備事業に伴う遺跡の確認調査として実施した。
3. 発掘調査は、県文化課主任主事面高哲郎、同長津宗重、同近藤協が担当した。
4. 調査にあたっては、当該市町教育委員会、農林振興局、土地改良区等の多大な協力があった。
5. 本書の執筆は、第I章、第II章第1・2・3・8節は面高、第II章第4・5・6節は近藤、第II章第7節は長津が行った。
6. 遺構・遺物の実測・製図、写真撮影等は各執筆者が行った。
7. 本書の編集は面高が担当した。
8. 出土した遺物は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章	はじめに	1
第II章	発掘調査の概要	2
第1節	北原牧地区遺跡	2
第2節	七野地区遺跡	5
第3節	百町原地区遺跡	7
第4節	小木原地下式横穴群	9
第5節	角上原地区遺跡	11
第6節	金剛寺原遺跡	13
第7節	七又木地区遺跡	15
第8節	善田地区遺跡	20

挿図目次

第1図	北原牧地区古墳位置図	3
第2図	古墳周溝等実測図	4
第3図	七野地区遺跡位置図及びトレンチ配置図	6
第4図	百町原地区遺跡位置図及びトレンチ配置図	8
第5図	小木原地下式横穴群トレンチ配置図・土層断面図、遺構・遺物実測図	10
第6図	角上原地区遺跡トレンチ配置図・土層断面図、遺物実測図	12
第7図	金剛寺原遺跡位置図、土層断面図、石器実測図	14
第8図	七又木地区位置図	16
第9図	七又木地区トレンチ配置図	17~18
第10図	善田地区遺跡位置図及びトレンチ配置図	20

図版目次

図版 1	北原牧地区遺跡	21
図版 2	七野地区・百町原地区・善田地区遺跡	22
図版 3	小木原地下式横穴群	23
図版 4	角上原地区遺跡	24
図版 5	金剛寺原遺跡	25
図版 6	七又木地区遺跡	26

第I章 はじめに

宮崎県内の遺跡の分布状況は、昭和51年度の遺跡地図では1,100ヶ所余りであったが、昭和55年より市町村で実施されている遺跡詳細分布調査の結果を見ると、4倍から5倍に増している。これまで県内の遺跡の分布調査は十分でなかったため、工事中の遺跡発見の届出等も多々ある。県内各地で実施されている農業基盤整備事業地内でも例外ではない。そこで、県教育委員会では、農業基盤整備事業のうち、ほ場整備ないし特殊農地保全事業など面積工事予定区内の遺跡の保護が緊急の課題であると考え、まず分布調査を行い、必要と認める場合は試掘調査を実施している。本年度は8ヶ所で発掘調査を実施している。調査を実施した個所については、下記のとおりである。

調査地	所在地	調査期日	調査担当者
北原牧地区	児湯郡新富町大字日置	昭和62年6月10日～13日	面高哲郎
七野地区	宮崎郡田野町字甲	昭和63年1月11日～14日	〃
百町原地区	日向市美々津町	昭和63年1月19日～23日	〃
小木原地下式横穴群	えびの市大字上江	昭和63年1月18日～22日	近藤 協
角上原地区	宮崎郡清武町大字今泉	昭和63年2月1日～5日・3月11日	〃
金剛寺原遺跡	宮崎市大瀬町	昭和63年2月9日～12日	近藤 協 面高 哲郎
七又木地区	児湯郡新富町大字新田	昭和63年2月16日～26日	長津 宗重
善田地区	串間市大字西方	昭和63年3月2日～4日	面高哲郎

第II章 発掘調査の概要

第1節 北原牧地区遺跡

1. 遺跡の位置

北原牧地区は、児湯郡新富町大字日置に所在する。日置川と鬼付女川の間には、南東へ延びる標高約60～70mの台地がある。台地面には浸蝕作用等により形成されたと考えられる緩やかな起伏が見られ、また、台地縁辺部には舌状の張り出し部が見られる。北原牧地区内の遺跡は、張り出し部に集落跡、台地中央付近の起伏部の頂部に古墳等が立地している。

2. 調査に至る経緯

北原牧地区では、本年度より県営農業基盤整備パイロット事業（尾鈴II期）が着手されている。事業区内には、上園遺跡、蔵園遺跡、西牧遺跡の他古墳が数基所在している。昨年度も当地区内の試掘調査を5地点で行い、新たに縄文早期の遺跡が確認されている。その調査結果等に基づき事業者と協議を重ねたが、本年度事業区内に古墳等も含まれることが判明した。古墳はその周囲を削られてはいるが、大半はその形状を保っており、また、周溝も残存していると予想された。発掘調査は、昭和62年6月10日から同月13日まで実施した。

3. 調査の方法とその概要

調査を実施した古墳は、字蔵園に所在する2基、字北原牧に所在する3基の計5基である。調査目的が墳丘の規模、周溝等の確認であったのでトレンチは放射状に設定するよう努めたが作物の関係で制限を受けている。字蔵園に所在する2基は富田村古墳として県指定の古墳となっている。

当地の基本層序は、第I層耕上、第II層黒色土、第III層アカホヤ、第IV層硬質の小白斑のある黒褐色ローム、第V層褐色ロームとなっている。

県指定富田村古墳6号は、四方を削られて略長方形を呈し、長軸13m、短軸8m、高さ約2mを測る。昨年、新富町教育委員会では地下レーダー探査により西半部において周溝を確認しているが、本年度調査したのは東半部で4ヶ所のトレンチを設定した。当地の土層は、第II層も良好に残り、第III層直上で周溝が確認された。周溝は2条あり、内側の周溝は、上幅3m、底幅0.5m、深さ約1.6mの断面台形状である。外側の周溝は、内側の周溝より約0.6mの位置で上幅約1.3m、底幅0.85m、深さ約0.3mである。外側の周溝より須恵器が集中して多量に出土し、器種は、大甕(2)埴(1)である。出土した多量の須恵器の大半は、大甕1個分のものである。内側の周溝からは溝中層で須恵器片1点が出土している。確認された溝より

復原される6号墳の墳丘の径は約16m、周溝を含めた径は約24.7mである。

県指定富田村古墳4号は、6号墳の南東約140mの位置にある。古墳の四方は削られて長方形を呈し、長軸8.7m、短軸3.6m、高さ1.2mである。作物の関係でトレンチは1ヶ所のみである。古墳の周囲は第Ⅴ層まで削平され、周溝は確認されていない。

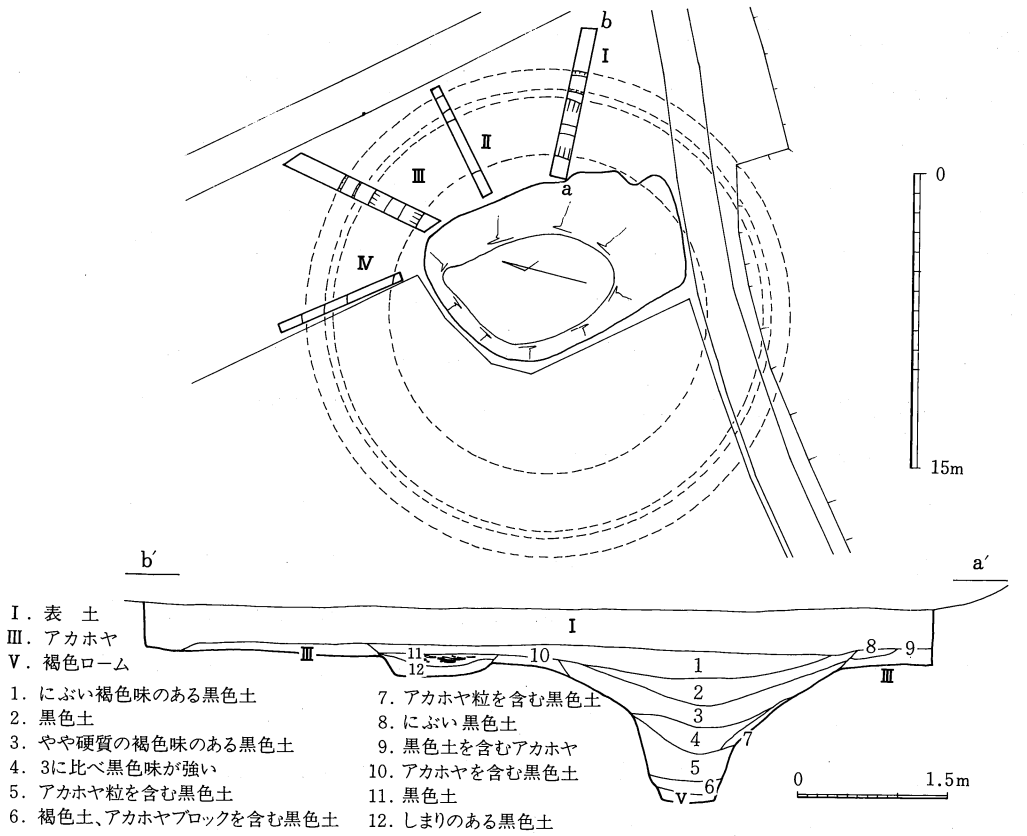
字北原牧に所在する古墳3基は未指定でいずれも周囲を削られ、四角形を呈している。古墳は、北より未指定1号、2号、3号と呼称して調査を行う。1号は、長軸14m、短軸12.8m、高さ2.2mである。トレンチは放射状に4本設定した。当古墳周辺の土層は概して残されており、溝は第Ⅲ層直上で確認され、幅は約3mである。今回の調査では溝は掘り下げていない。溝より復原される墳丘の径は約24mである。

2・3号は、その南西部が鶏舎建設のため2mほど削平されている。トレンチは、それぞれ3ヶ所設定した。2・3号の東半部も削平を受けており、第Ⅳ層ないし第Ⅴ層以下が残存するのみである。2号周辺は削平が著しく、溝の底と思われる部分がわずかに確認できたのみである。3号も残りは悪いが、3トレンチで溝が確認された。溝の上幅1.7m、底幅0.5m、深さ約0.6mを測り、溝より復原される墳丘の径は約12.3mである。

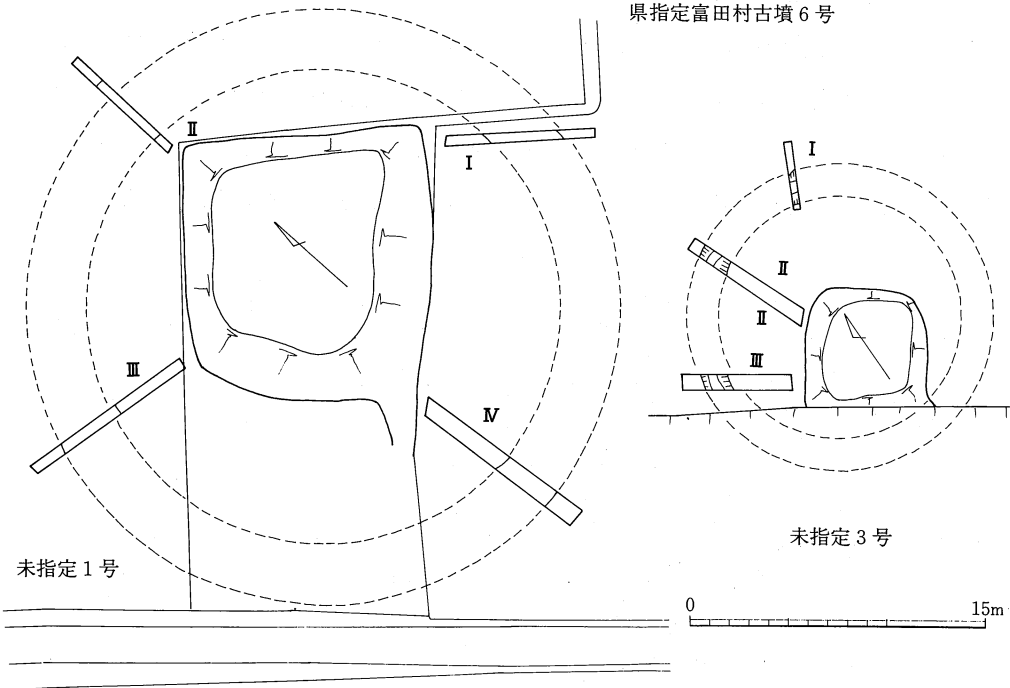
今回の調査では4基の古墳の周溝が確認され、うち3基の墳丘を復原できた。築造時期については、出土遺物より6世紀頃と考えられる。富田村古墳6号では2重の周溝が検出されたので、事業者と協議の結果、幸いにも本年度の事業予定区内に町有地があったためにこの場所を町有地に換地し、周溝部分を含めて保存された。その他の古墳の墳丘部分についても同様な措置をとり、その周囲についても極力削平を小さくしている。なお、未指定1号についても本年度新富町教育委員会で周囲全面の調査をした結果、周溝は2重であることが確認されている。



第1図 北原牧地区古墳位置図



県指定富田村古墳6号



第2図 古墳周溝等実測図

第2節 七野地区遺跡

1. 遺跡の位置

七野地区は、宮崎郡田野町字甲に所在する。今回調査対象となった地区は、田野盆地の南西部の標高約210mの台地上である。当台地は、下部に灰石あるいはシラスをもついわゆるシラス台地で標高220mから210mへと緩やかに傾斜する。台地の中央西よりには、標高差約13m、傾斜の急な開析谷が南へ走っている。

2. 調査に至る経緯

七野地区では、以前知られていた遺跡は丸野遺跡のみであった。当地で県営特殊農地保全整備事業予定地となって以来、県教育委員会では数回分布調査を実施し、事業予定地内で4ヶ所の遺物散布地を確認している。うち丸野第2遺跡の1ヶ所については、昭和61・62年度田野町教育委員会が発掘調査を実施している。

昭和63年度工事予定区内に遺物散布地が所在するため、昭和63年1月11日から同月14日まで試掘調査を実施した。

3. 調査の方法と概要

調査対象地は、台地中央西よりの開析谷をはさむ西側の台地で東への緩斜面である。調査は南へ延びる台地全域で調査を実施する予定であったが、中央部は耕作者の同意が得られず、南北両端でのみ調査を実施した。なお、中央部では褐色ローム出土と推定される剥片を採集している。

当地の基本層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層アカホヤ、第Ⅳ層硬質の黒褐色ないし褐灰色土、第Ⅴ層褐色土、第Ⅵ層硬質の褐灰色のブロックを含む褐色土、第Ⅶ層、縦の亀裂間に褐色土を含む硬質の褐灰色土、第Ⅷ層第2オレンジ(AT)となっている。場所によっては、アカホヤの上に2次アカホヤの堆積が見られる。

南区ではトレンチ1.2m×5mを2本、1m×3mを1本設定して調査する。耕土下は2次アカホヤで、第Ⅱトレンチで礫が少量出土したのみである。トレンチを設定した上段畑地は大根の作付のため調査出来なかったが、焼石の散布が1ヶ所で認められた。

北区では1.2m×5mを基本としてトレンチ8ヶ所を設定する。第Ⅰ・第Ⅷ、第Ⅵトレンチは第Ⅲ層上層、第Ⅱ～第Ⅳ・第Ⅶトレンチでは第Ⅲ層ないし第Ⅳ層まで削平を受けている。第Ⅴトレンチのみ第Ⅱ層が残存している。第Ⅴトレンチは第Ⅱ層より時期不詳の土器片が出土し、第Ⅱ層下の2次アカホヤ層で河原石が検出された。第Ⅴトレンチ南畑地では曾畑式系

と思われる短沈線文の土器が採集されている。第Ⅳトレンチでは第Ⅳ層で剥片、河原石が出土し、第Ⅱトレンチでは、第Ⅶ層下層で焼石、剥片と思われるものが出土した。

七野地区は、作付等のため限定された調査であったが、南区には縄文時代早期、北区に旧石器時代及び縄文時代の文化層が存在すると推定される。また、中央部についても表採資料により遺跡と思われるが、残存状況は不明である。



第3図 七野地区遺跡位置図及びトレンチ配置図

第3節 百町原地区遺跡

1. 遺跡の位置

百町原地区は、日向市美々津町に所在し、宮崎県の中央部に三角形にひらける宮崎平野の北端に位置する。当地は、東に日向灘を望む標高約40m～30mの緩やかに北及び東へ傾斜する台地である。台地の北部を石並川が東流し、台地北縁には水により浸蝕され形成された小規模な舌状の台地が見られる。台地の南部には水無川が南流ないし東流し、付近は台地と言うより起伏に富んだ地形となっている。

2. 調査に至る経緯

百町原地区では、現在、百町原地区県営ほ場整備が実施されている。当地区内では昭和57年実施された遺跡詳細分布調査により落鹿遺跡が確認されている。昭和62年度、その一部が工事予定区が含まれていたため東臼杵農林振興局と協議を行った結果、現状保存が困難な道路部分の発掘調査が、昨年11月から12月にかけて日向市教育委員会により実施され、縄文早期及び弥生後期の遺構が検出されている。

昭和63年度工事予定区内に遺跡は所在していなかったが、分布調査を行った結果、土器片の散布が認められ、また、工事予定区周辺で石斧、磨石等が日向市教育委員会により採集されていたので、昭和63年1月19日から同月23日まで試掘調査を実施した。なお、調査期間中、本年度の工事が拡大し、その拡大部分の地区は台地縁辺でその近くで土器等の散布地が所在したことから、急遽調査最終日に試掘調査を行った。その結果、アカホヤの下層で縄文早期の集石遺構が確認され、協議を行った結果、工事により影響を受ける部分については、昭和63年度調査を実施することになった。

3. 調査の方法と概要

調査は、便宜上AからCと3地区に分けて行った。A地区は分布調査により丹塗りの土器小片等の散布が認められ、B地区は、その東が既に工事が終了しているがその地区において日向市教育委員会により石斧・磨石が採集されている。C地区は、本年度工事予定であった場所である。

調査区の基本層序は、第Ⅰ層耕土、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層アカホヤ、第Ⅳ層硬質の黒褐色ローム、第Ⅴ層褐色ロームであるが、以前耕地整理が行われているため層の残存状況は悪い。

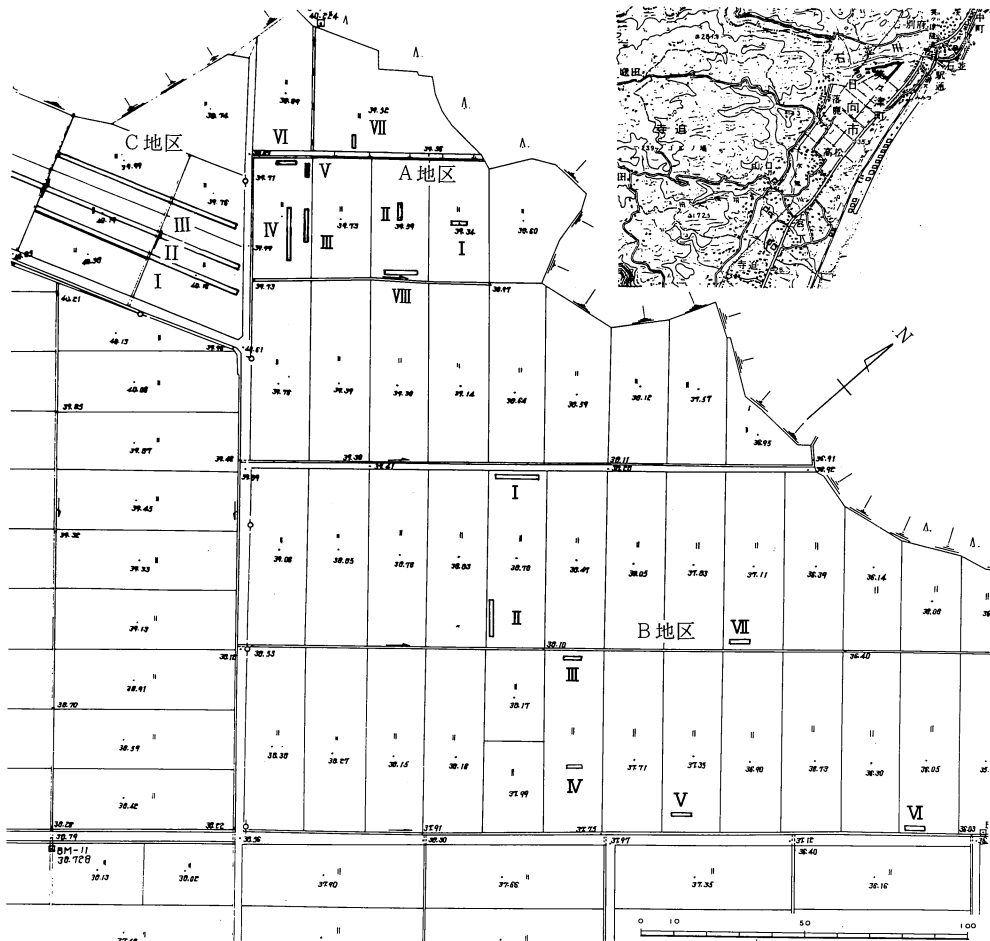
A地区では幅1.2mを基本とするトレンチを8ヶ所設定した。層は第Ⅲ層あるいは第Ⅳ層まで削平を受けている。遺物は、第1トレンチで第Ⅲ層アカホヤの一部が残存し、第Ⅳ層下層で焼石が出土した他は、第Ⅲ・第Ⅳトレンチの攪乱層である第Ⅰ層で出土したのみで遺構

は検出されていない。

B地区では幅1mのトレンチを7ヶ所設定した。層の残存状況は特に悪く、第IV層黒褐色ロームまで削平を受けた部分もある。遺物は、第IV層まで削平を受けていた第IIIトレンチの第V層でディサイト質溶結凝灰岩に類似した石質の剥片が1点出土したのみである。

C地区は、A地区の西隣接地である。幅約1.8mのトレンチを3ヶ所設定し重機を使用して調査する。第III層下層まで削平を受けている。第II・第IIIトレンチの第IV層下層で集石遺構3基が検出され、遺物は、チャート片等が出土している。

百町原地区の調査は3地区に分けて行ったが、A・C地区には縄文時代早期の文化層、B地区には旧石器時代の文化層が存在すると推定される。なお、A地区では遺構は検出されていないが、土器片等が散布し、層の残存状況から弥生時代頃の遺構が残存と思われる。



第4図 百町原地区遺跡位置及びトレンチ配置図

第4節 小木原地下式横穴群

1. 遺跡の位置

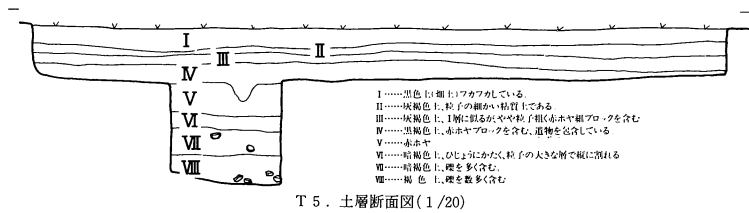
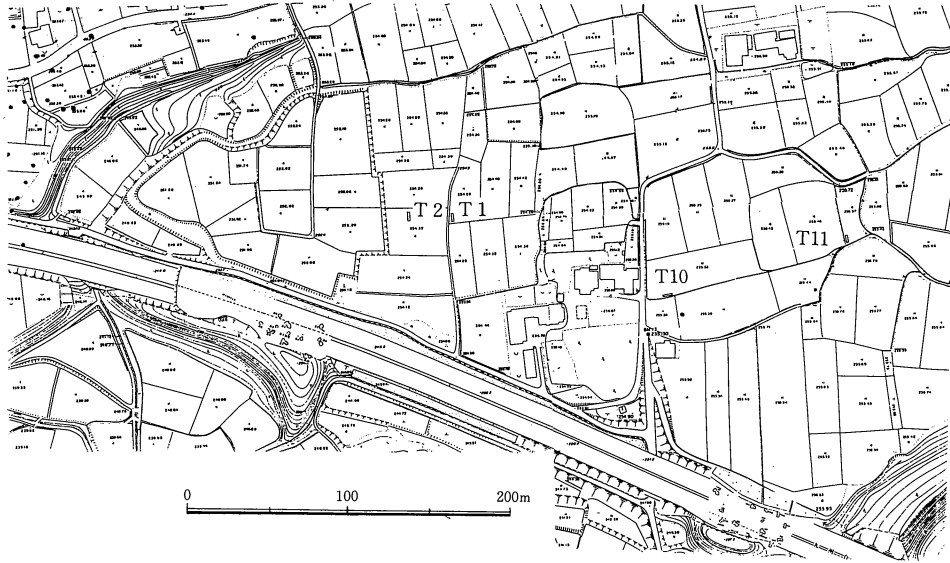
遺跡は、えびの市大字上江ほかにある。当地は東西約14km、南北約5kmの範囲で広がる加久藤盆地の中央付近にあって、北に川内川、南に池島川の間挟まれた標高約250mの低位段丘面に立地する。調査地は西上江、宮原両地区にまたがり、南端では池島川とその沖積面を眺む段丘終端部にあたる。段丘終端付近は湧水点が点在するとおもわれ、湾状に入り込んで開析された谷部が所々にみられる。段丘中央部は耕地、あるいは宅地化されているために一見平坦に見えるが、旧地形はゆるやかな起伏をもっていたものと想像される。

2. 調査に至る経緯

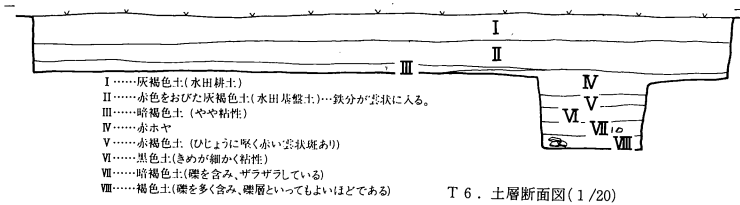
えびの市上江・池島地区県営圃場整備事業は、昭和59年度から実施されているが、昭和61年度事業においては域内に遺跡の所在が確認されたので、えびの市教育委員会が主体となって永田原遺跡の発掘調査がおこなわれた。同じく62年度事業区内においては小木原地下式横穴群中に当該工事区がかかるため蕨遺跡の発掘調査が市教委によって実施されている。昭和63年度施行の事業区は、上記蕨遺跡の南から東に広がる西上江・宮原地区に該当するが、これ等の地域は昭和60年に実施された詳細分布調査において小木原地下式横穴群遺跡の範囲内に含まれているか、あるいはそれに関連する遺構が分布する可能性が大とされる地域である。よって、より正確に遺跡の広がりを確認するため、昭和63年1月18日から同月22日の間発掘調査を実施した。

3. 調査の結果

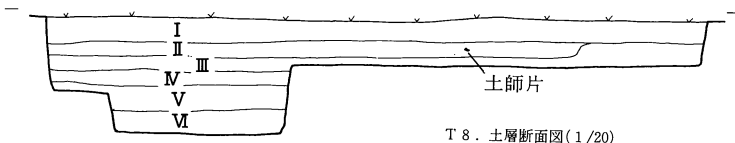
トレンチはT₁からT₁₁まで、1.2m×5.0mを基準として設定し、赤ホヤ面で一担そろえたあと順次下層まで掘り下げて、無遺物層まで土層を確認している。遺構・遺物を検出したトレンチを中心に記述する。T₅は表土下約40cmで赤ホヤ層に達する。柱穴3、西端に溝状の落ち込みを確認している。遺物はⅢ～Ⅳ層中に近世陶器碗片、土師坏片約20点が出土している。Ⅶ・Ⅷ層は礫を多く含む層で、遺物の出土はない。T₁₀、T₁₁を設定した箇所は、過去において地下式横穴墓と考えられる遺構が記録されている地点に近接している。T₁₀は赤ホヤ面まで深さ75cmあり、赤ホヤ層も50cmの厚さで残存している。西端で黒褐色の埋土をもつ遺構の一部を検出している。出土した遺物はⅢ・Ⅳ層から玉縁口縁白磁碗片、土師片数点が出土している。以上、T₅地区では中世遺構の、T₁₀地区では中世の遺構のほか地下式横穴墓の分布域にあてられる。



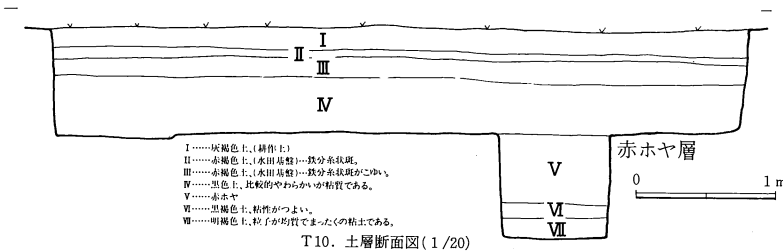
T 5. 土層断面図(1/20)



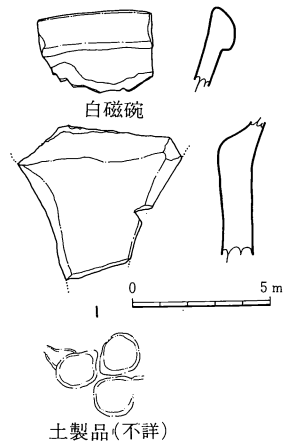
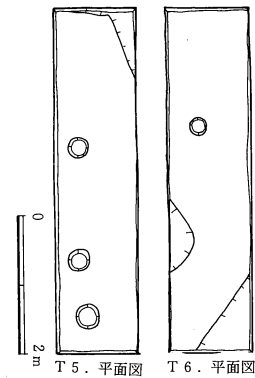
T 6. 土層断面図(1/20)



T 8. 土層断面図(1/20)



T 10. 土層断面図(1/20)



第5図 小木原地下式横穴群トレンチ配置図・土層断面図、遺構・遺物実測図

第5節 角上原地区遺跡

1. 遺跡の位置

角上原遺跡は清武町大字今泉角上にある。当地は、清武川の支流の一つである水無川の右岸にひろがる高位河岸段丘（標高59～63m）に位置しており、水無川が形成した沖積面との比高は約30mある。段丘面の平坦部は東西長約1.5km、南北幅約300mと東西に細長い。段丘南側は双石山（ぼろいしやま）（509.3m）山系の丘陵地（約180～200m）がひろがり、段丘面に向って幾つもの小さな低丘陵が舌状にのびてきている。またその丘陵裾部には萱池、大堤等の大小の池がみられる。丘陵端部が段丘面と接する付近は、湧水地が点在し、開析部には複雑に入りくんだ湾田が存在する。このように、本地区は遺跡の立地する地理的条件としては申し分のない環境である。

2. 調査の経緯

清武町角上地区は、昭和63年度から当地区ではじまる県営圃場整備事業の対象地区に予定されている。県教育委員会では昭和62年8月の分布調査の結果をうけて、昭和63年2月1日～5日、3月11日の6日間にわたって、遺跡の範囲を把握するため試掘調査を実施した。

3. 調査の概要

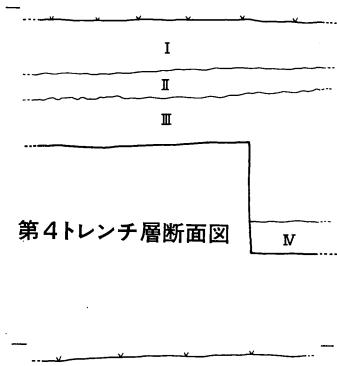
調査地はすべて畑地となっている。収穫済みの耕地に幅1.4m、長さ5.0m～80mのトレンチを南北方向を基本として7本設定して調査している。本遺跡の基本的層序は二つある。最も広域にみられる層序は、耕作土下に、二次堆積の赤ホヤ層、次にしまった褐色粘質土がくるものである。風積したと考えられる純粋な赤ホヤ火山灰がみられたのは第15トレンチのみであった。段丘面の南端縁は、二次堆積赤ホヤ層直下が明黄褐色の強粘性土となっている。この明黄褐色粘土上層からは焼けた角礫の集中出土点が第7トレンチ②にみられた。検出した遺構は溝状遺構・柱穴である。溝状遺構は、第1・2・4・8①・9トレンチで検出している。1・2トレンチ検出の溝状遺構は東～西方向に連続しているものと考えられ、埋土中に近世陶磁碗が出土している。4トレンチのそれは幅70cm、深さ44cmで黒褐色埋土中に灰白色のガラザラした火山灰を層状に含み、断面形は「U」字形を呈している。柱穴は、第10トレンチの①⑤トレンチで検出された。二次堆積赤ホヤ層中に明黄褐色弱粘性土が柱穴埋土となっていたために、柱穴と確認するのがやや困難である。直径30cm、深さ20～45cmの柱穴で、⑤トレンチP2からは、弥生（土師か）土器胴部小片が出土している。

遺物、とりわけ土器片が集中して出土したのは第4・9トレンチにおいてであり、表土下

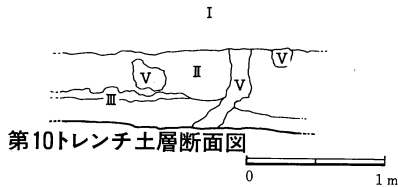
約50cmで出土している。いずれも、赤ホヤ火山灰直上層から得られており、口縁直下に2条の刻目突帯をもつ下城式でもやや古様の甕や、刻目突帯直下に穿孔されない孔列が巡る甕形土器口縁部が出土している。以上、当遺跡においては、第1・2・4・7・10・16トレンチ附近に遺構の集中域がみとめられる。



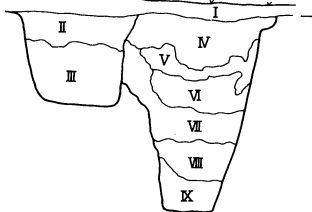
角上原遺跡トレンチ位置図



第4トレンチ層断面図



第10トレンチ土層断面図



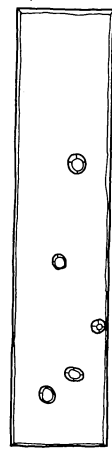
第8トレンチ溝状遺構土層断面図

第4トレンチ

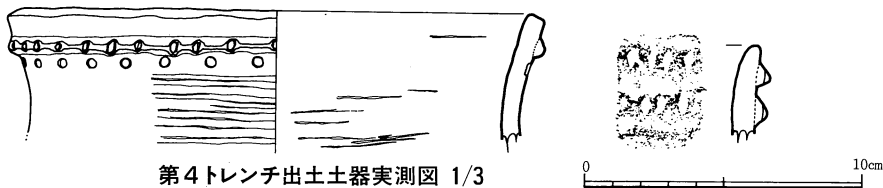
- I……暗褐色土 (サラサラして粘性なし、耕作土である)
- II……橙 色 土 (赤ホヤ火山灰土であるが明黄褐色土が雲状に混り、純粋火山灰ではない)
- III……褐 色 土 (粘性があり、かたしまっている。明褐色土と暗褐色土が雲状に混っている)
- (II・III層との層界は漸移)
- IV……黒褐色土 (やや粘性あり、比較的ゆるくしまる)

第8トレンチ

- 1. 褐色土 (粘性土である)
- 2. 灰褐色土 (小さな砂粒を多く含みザラザラしている)
- 3. 暗褐色土 (ひかてきやわらか、赤ホヤ小ブロックを含む)
- 4. 褐色土 (ひかてきしまっており、赤ホヤ小ブロックを含む)
- 5. 橙褐色土 (赤ホヤ大ブロックを含む層である)
- 6. 暗褐色土 (白色の軽石粒を含み、ザラザラしている)
- 7. 灰褐色土 (白色の軽石粒を多量に含む)…火山灰層…二次堆積。
- 8. 暗褐色土 (やわらかく、やや粘性、赤ホヤ小ブロック含む)
- 9. 褐色土 (各層よりやや明るい色調、赤ホヤブロック含む)



10トレンチ⑤ 柱穴



第4トレンチ出土土器実測図 1/3

第6図 角上原地区遺跡トレンチ配置図・土層断面図・遺物実測図

第6節 金剛寺原遺跡

1. 遺跡の位置

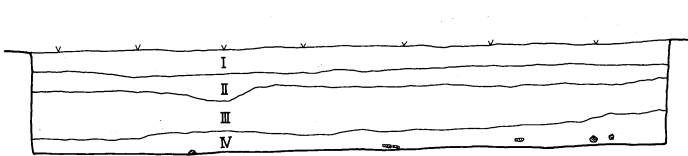
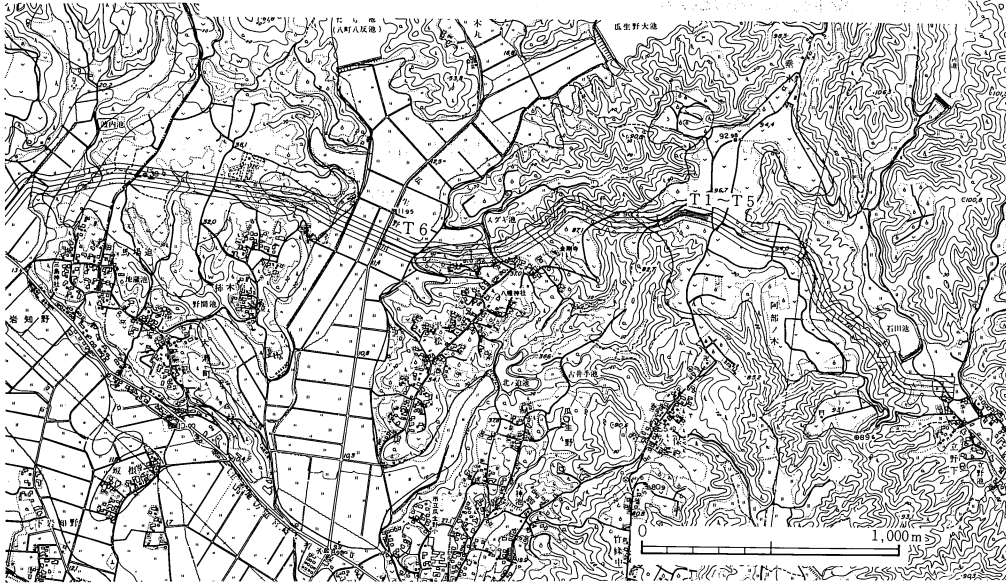
本遺跡は大淀川下流の左岸にあつて、最高標高120mの山塊から宮崎平野にむかつて南々東につきでる舌状丘陵のうちのひとつに位置している。本調査地から北東約800mの地点には、縦長剥片を素材とした長さ6.9cmの流紋岩製剥片尖頭器が表採された垂水公園があり、この丘陵先端付近の標高20m地点には、縄文早～前期の貝塚として知られる柏田貝塚がある。

2. 調査の概要

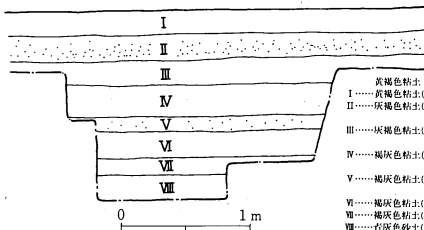
本遺跡調査は、県営農免農道整備事業瓜生野地区工事に伴う遺跡確認調査であり、宮崎県文化課が、昭和63年2月9日・10日・12日の3日間にわたり実施した。幅1.2m×長5.0mのトレンチを6箇所設定している。T₁からT₅は標高約92mの丘陵平坦面、T₆は丘陵下の標高約11mの水田面に設けた。丘陵上においては、表土下の削平、攪乱がみられ、赤ホヤが残存している地点でも、純粋な風積赤ホヤ層はみられず、すべて二次的堆積の赤ホヤ層であった。しかし、それでも赤ホヤ層下の基本層は比較的良好に残存している。遺構・遺物が顕著にみられたのはT₄である。T₄では表土下約80cmのⅣ層において、赤化の著しい焼礫約60点、および二次加工をほどこした硅質凝灰岩製の剥片石器1点が出土している。Ⅳ層は粒子均質でこまかく、粘性のひじょうに強い明黄褐色土層で旧石器時代に比定される層である。焼礫は、出土状況からして旧石器時代の「集石遺構」の一部としてとらえることができる。

T₆は、現水田下約160cm掘り下げて土層の確認をおこなっている。Ⅰ層からⅧ層のうち、Ⅰ層からⅦ層までが、強粘性の粘土土壌で、Ⅷ層から青灰色のかたくしまった砂層となる。Ⅰ層からⅦ層までは黄褐色から褐灰色を呈し、比較的弱いグライ状態下にあったとおもわれる。マンガン斑文は、Ⅱ層とⅤ層において顕著にみられるが、Ⅱ層のそれは現水田面に由来するもので、Ⅴ層のそれはより古い時期の水田基盤の可能性がある。しかし、その時期を特定できるような遺物は出土していない。以上のような土壌環境からすると、かなり長期にわたって一帯は水田として営まれた可能性があり、それはプラントオパール、花粉分析等によって確定できるものとおもわれる。

金剛寺原遺跡においては、以上の結果から、丘陵上では旧石器時代の遺構が、丘陵下では水田跡の検出がみとめられるものとおもわれる。



第4トレンチ土層断面図

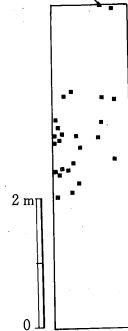


第6トレンチ土層断面図(黒点はマンガン斑文)

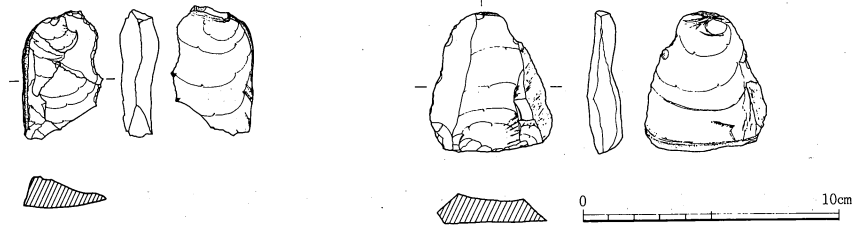
- I.....褐色土(現耕作土である。粘性なくサラサラしている)
- II.....褐色土(田耕作土である。I層に6ヶややしまっている)
- III.....明褐色土(比較的良好にしまっている。所々にやや粘性のかたい褐色ブロックを含む。また、明褐色の粘性のない土を点状に含む)
- IV.....明黄褐色土(粘性のほとんどない。しまった土で均質である。塊層が含まれる)

- 現水田土
- I.....黄褐色粘土(2.5YR5/3) ……粘性であるが粒子のこまかい砂が入り、ややサラツク。鉄分斑文あり。
 - II.....灰褐色粘土(10YR5/6) ……強粘性でかたし。3.0mmのマンガン斑が密に入る。鉄分斑文あり。縦方向にクラックが入る。水田米軽層である。
 - III.....灰褐色粘土(10YR4/4) ……強粘性で水分を多く含む粘土となる。1.0mmのマンガン斑がややまばらに入る。鉄分斑文まばらに入る。
 - IV.....褐灰色粘土(10YR6/1) ……強粘性で水分を多く含む粘土となる。鉄分斑文、糸状斑が多くなる。マンガン斑まばらに入る。
 - V.....褐灰色粘土(7.5YR5/2) ……強粘性で水分を多く含む粘土で、比較的好わらかい。3.0mm大マンガン斑をまばらに含む。鉄分糸状斑文がまばらにある。
 - VI.....褐灰色粘土(7.5YR5/1) ……V層よりやや明るい色調。強粘性。V層より。鉄分糸状斑がV層よりまばらにみられる。
 - VII.....褐灰色粘土(7.5YR4/1) ……V層よりさらに暗い。強い粘性となる。鉄分がみられない。
 - VIII.....黄灰色砂土(5BG6/1) ……なにもふくまない。黄灰色の砂土で、粒子均質である。ひじょうにかたくなる。

剥片石器



焼礫の出土状況(平面図) 第4トレンチ



剥片石器(第4トレンチ) 1/3

表採された剥片(第4トレンチ付近) 1/3

第7図 金剛寺原遺跡、位置図、土層断面図、石器実測図

第7節 七又木地区遺跡

1. 遺跡の位置

七又木地区は、児湯郡新富町大字新田に所在する。一ツ瀬川河口左岸の洪積台地の新田原面の西端部標高70～80mに位置する。当台地の西側の縁辺部には八幡上A遺跡(弥生時代)⁽¹⁾、八幡上B遺跡(弥生～古墳時代)・竹淵経塚(中世)が、南縁辺部には新田原古墳群がある(第1図)。

2. 調査に至る経緯

児湯郡内の西都市・木城町・高鍋町・新富町で農業基盤整備パイロット事業(尾鈴地区・尾鈴II地区)が実施されている。当事業に伴う発掘調査を新富町教育委員会が藤掛遺跡(昭和56年)・川床遺跡(同60年)・上蘭遺跡(同61～63年)で行っている。昭和63年度に当地域の農業基盤整備パイロット事業を実施する計画があがったので、昭和62年11月5日に分布調査、同63年2月16日～26日に発掘調査を行った。

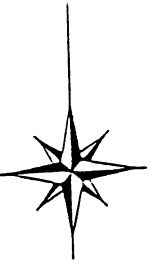
3. 調査の方法と概要

七又木地区は、調査対象地が広範囲であり、かつジャガイモの作付のためにトレンチを設定する場所が限定された。1.5m×3mのトレンチを54ヶ所入れた(第2図)。当地区の基本層序は第I層褐灰色土(耕作土)、第II層黒褐色土、第III層黄橙色土(アカホヤ)、第IV層暗褐色土、第V層褐色土である。

A地区

当地域の東側に位置し、南へ舌状に張り出す丘陵で、中央部の最高位に国指定新田原古墳群の第34・37号墳と未指定古墳が存在する。

北側のT-4・10・5のうちT-4・10はアカホヤ層は既に削平されていたが、T-5から南のT-2・3・6～9・11～14のアカホヤ層が残っており、その上層より土師器片が出土した。T-6からは溝状遺構が検出された。T-12からは石庖丁片と思われる研磨された扁平な石が出土している。T-8のアカホヤ層の下位の明褐色土層(粘質)から焼石が出土しており、集石遺構の存在が推定される。未指定古墳の東側にT-54(1m×7m)を設定した結果、アカホヤは既に削平されており、周溝も残存してなかったが、墳丘の周囲には葺石があり、古墳であることには間違いない。新田原34・37号墳の周囲は飼料作物等が作付してあったので、トレンチは設定できなかった。A地区全体の畑一枚一枚の分布調査を行った結果、土師器片が表採された。



第9図 七又木地区トレンチ配置図

B 地区

当地区の主体を占める台地で東西に伸びている。T-15~17はアカホヤ層が良く残っており、曾畑式土器と思われる沈線文土器が出土している。T-18~24は以前に重機深耕されておりアカホヤ層が削平されて下層の褐色土層が残存していた。そのうちT-20・21のみがアカホヤ層が残っており、その上位の黒色土層から土師器が出土している。古墳と思われる高まりにT-49を設定したが、戦時中の戦闘機の誘導路の石を積みあげたものであることが判明した。T-52では幅4mの東西に伸びる誘導路を確認した。T-25~28はアカホヤ層が良く残っており、T-25・26の上位の黒色土層から土師器が出土した。T-42~48のうちT-43・44はアカホヤは削平されていたが、その他はアカホヤは残存しており、その上位の黒色土層から土師器が出土した。T-29・39はアカホヤ上位の黒色土層から縄文時代後・晩期（孔列土器）の土器が出土した。B地区全体の畑1枚1枚の分布調査を行った結果、打製石鏃・磨製石斧・土師器・須恵器・土師器（平安時代・中世）が表採された。

C 地区

B地区の本丘陵の西側で南に伸びる舌状丘陵である。北側のT-37・38はアカホヤ層が残っており、その上位から土師器が出土している。南側のT-31~36はアカホヤ層の上位から弥生土器が出土し、特にT-36が多い。T-34では柱穴が、T-35では道が検出された。C地区全体の畑1枚1枚の分布調査を行った結果、弥生土器片・土師器片が表採された。

まとめ

発掘調査と分布調査の結果、A地区で縄文時代早期・古墳時代の遺跡1ヶ所、古墳1基、B地区で縄文前期の遺跡1ヶ所、縄文時代の遺跡1ヶ所、縄文時代後・晩期、古墳時代の遺跡1ヶ所、古墳時代の遺跡1ヶ所の計4ヶ所、C地区で弥生時代の遺跡1ヶ所が確認された。

註

- (1) 新富町教育委員会『新富町遺跡詳細分布調査報告書』 昭和57年

第8節 善田地区遺跡

1. 遺跡の位置と調査に至る経緯

善田地区遺跡は、串間市大字西方に所在する。遺跡は、串間市の中央部を南流する福島川と善田川の間を南西方向に延びる台地上に立地し、南に志布志湾を望む。台地は、標高17～14mで緩やかな起伏を見せながら南及び東へ傾斜している。台地西縁は概して高く、舌状の地形を示す個所が数ヶ所見られる。

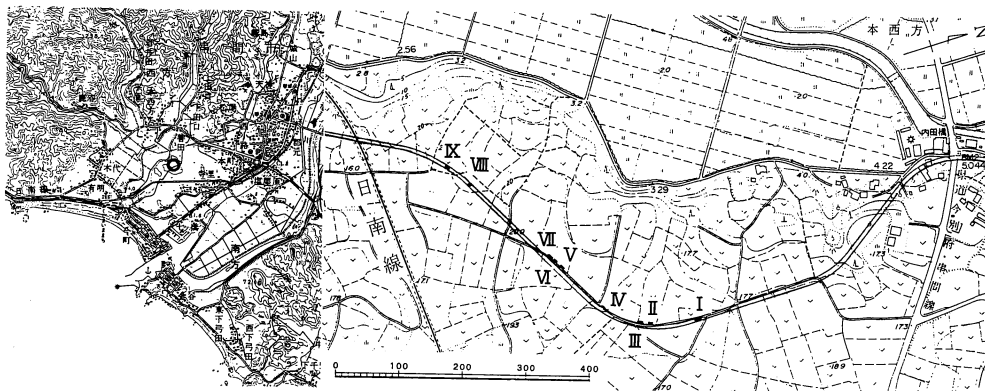
台地上では数基の古墳（現在墳丘は消滅）、銭亀遺跡等が知られているのみであったが、当地に広域農道が建設される計画であったので分布調査を実施したところ、台地のほぼ全域で縄文～中世の遺物の散布が認められた。広域農道は本年度から工事に着手され、昨年8月から10月にかけて唐人町遺跡が調査されたが、遺跡は、縄文・古墳・中世の遺跡であることが判明している。昭和63年度もその延長線上が工事される予定であるので、昭和63年3月2日から4日まで試掘調査を実施した。

2. 調査の方法と概要

当地の基本層序は、第I層耕土、第II層黒色土、第III層御池ボラ、第IV層黒褐色土、第V層アカホヤ、第VI層硬質の黒褐色土、第VII層褐色土となっている。第V層下には粘質の黒色土が見られる場合もある。当地で確認できる最下層はシラスである。

調査は、1m×3mを基本としてトレンチを9ヶ所設定した。各トレンチの層序を見ると高所ほど第V層ないし第VI層まで削平を受け、低所ほど層の残存は良く第II層も良好に残っている。各トレンチ周辺では遺物が採集されるが、遺構・遺物が検出されたのは第IV・第XIトレンチのみである。第IVトレンチでは、第VII層まで掘られ床面が固く締まる溝状遺構が検出され、第IXトレンチでは第VI層下層より焼石が検出している。

今回の調査は一部であったが、当地に縄文・中世の遺跡が存在すると推定される。



第10図 善田地区遺跡位置図及びトレンチ配置図

图

版

図版1 北原牧地区遺跡



富田村古墳6号



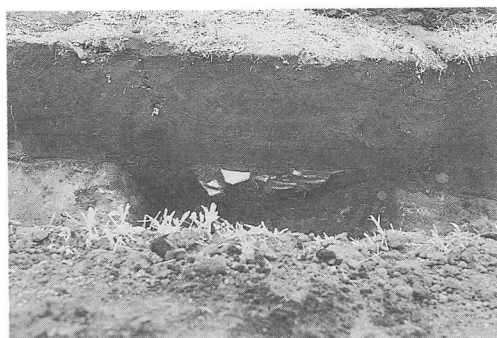
6号IT



III・IV T



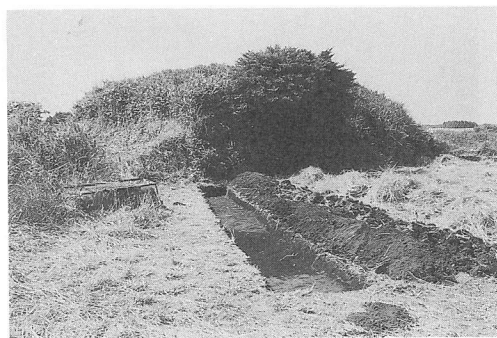
I・II T



I T



未指定古墳(1~3号)号

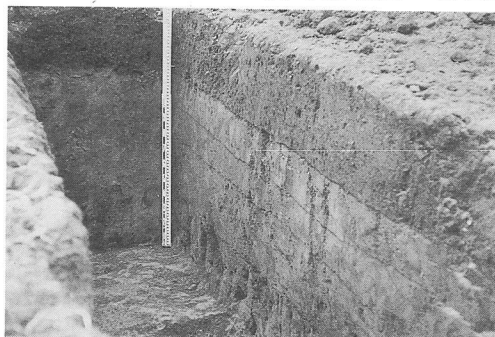


未指定1号

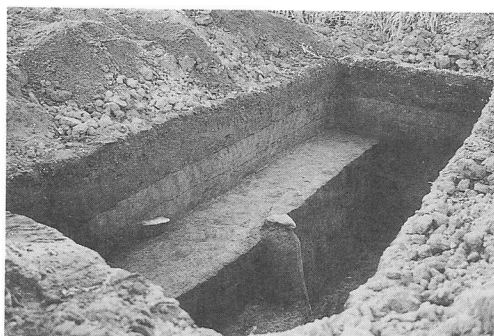


未指定3号

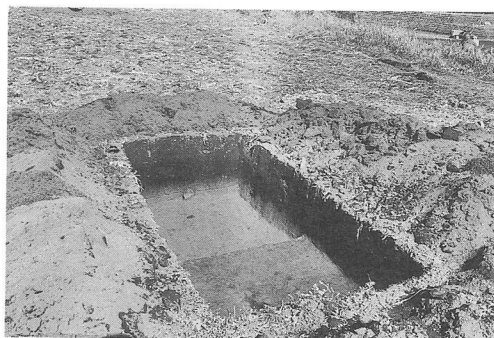
図版2 七野地区・百町原地区・善田地区遺跡



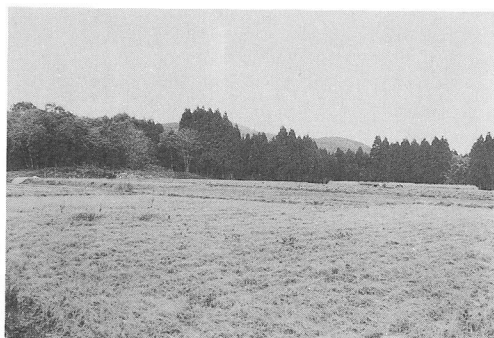
七野北区ⅡT



七野北区ⅢT



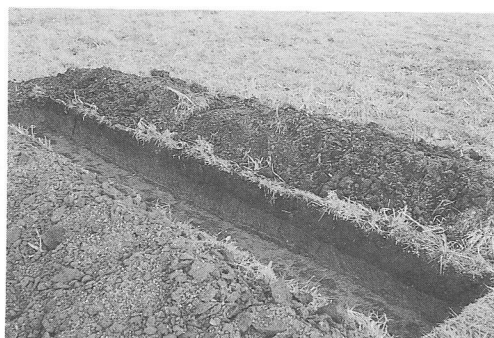
七野北区ⅤT



百町原地区



百町原A地区ⅠT



百町原地区B地区ⅢT



善田地区ⅥT

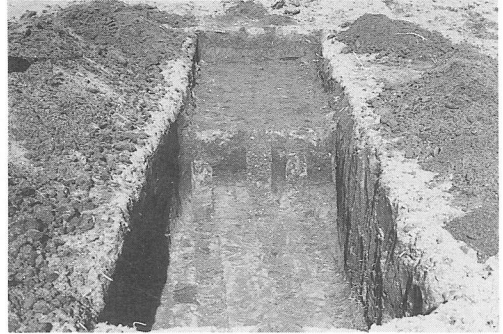


善田地区ⅣT

図版3 小木原地下式横穴群



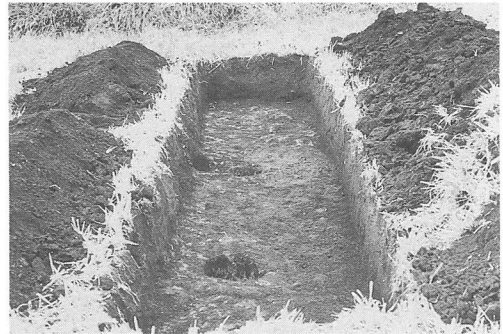
第1トレンチ



第2トレンチ



第10トレンチ



第5トレンチ



第8トレンチ



第10トレンチ



第8トレンチ土層断面

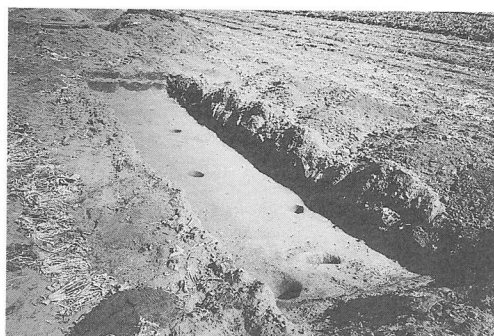


第10トレンチの遺構

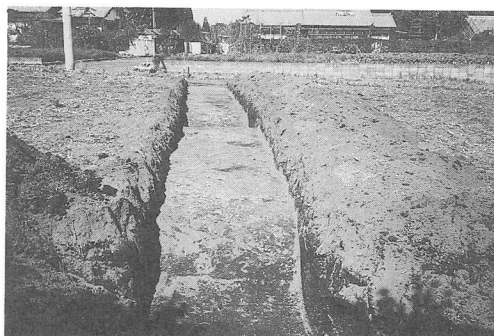
図版4 角上原地区遺跡



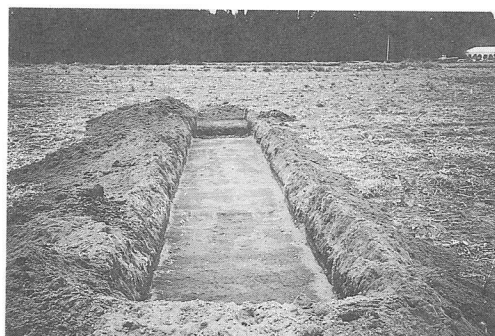
角上地区西側部分景



第10トレンチ⑤



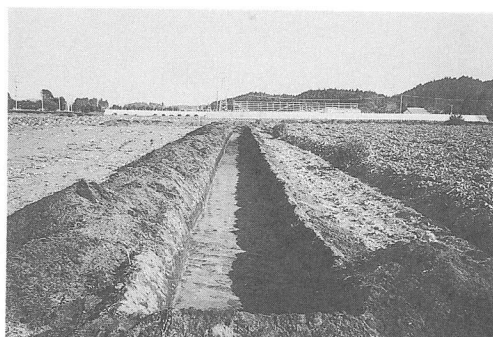
第1トレンチ



第8トレンチ



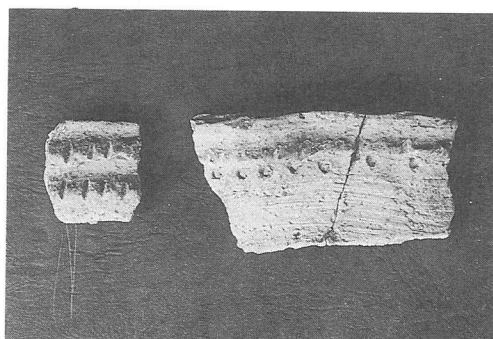
第9トレンチ



第4トレンチ

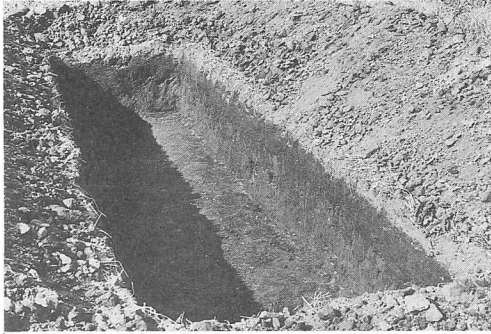


弥生土器の集中点(T9)

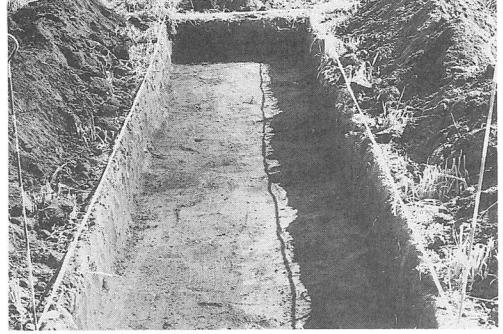


出土土器(T9)

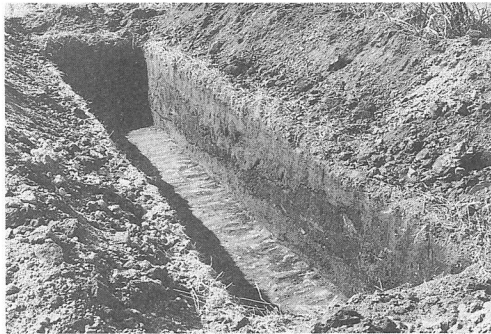
図版5 金剛寺原遺跡



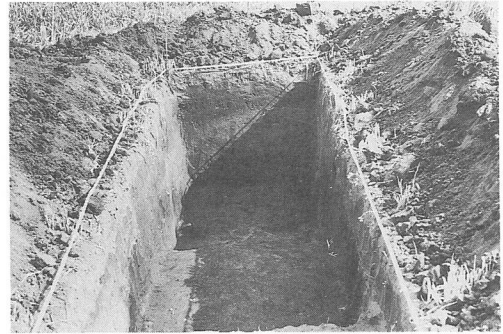
第1トレンチ



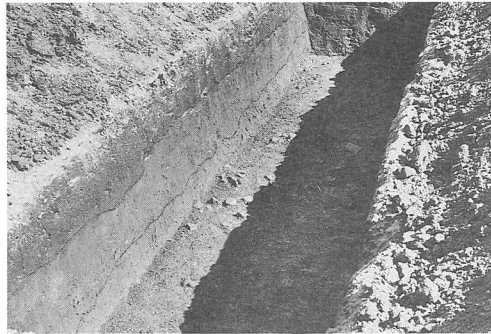
第5トレンチ



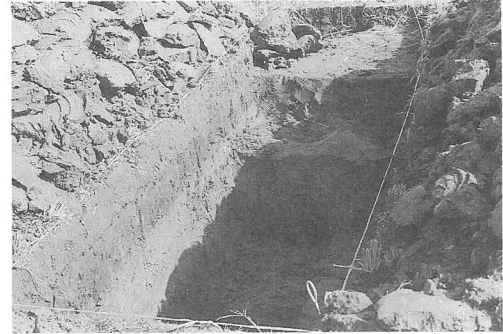
第2トレンチ



第5トレンチ



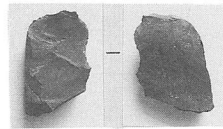
第4トレンチ



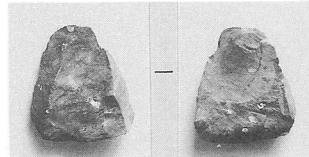
第6トレンチ



焼礫出土状況(T4)

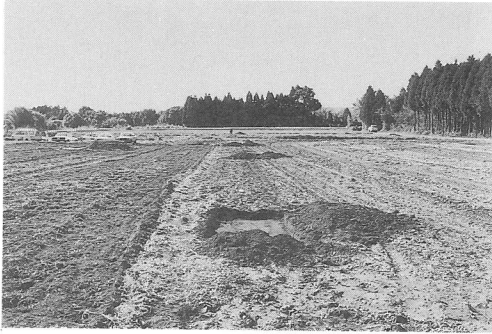


剥片石器(T4)



剥片(表採)

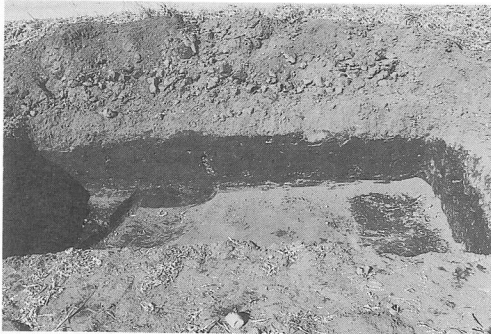
図版6 七又木地区遺跡



A地区 T-4・5・10



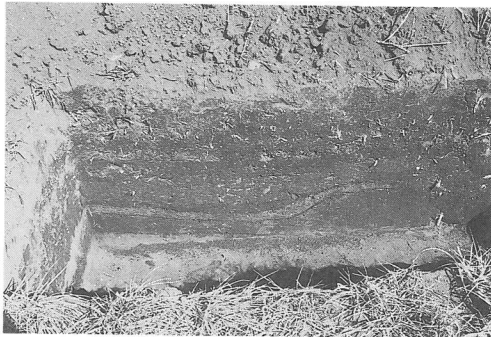
A地区 T-3



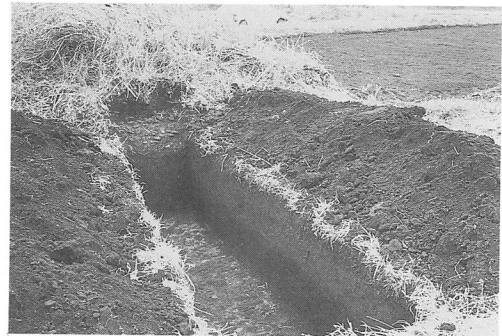
A地区 T-6



B地区 T-15・16・17



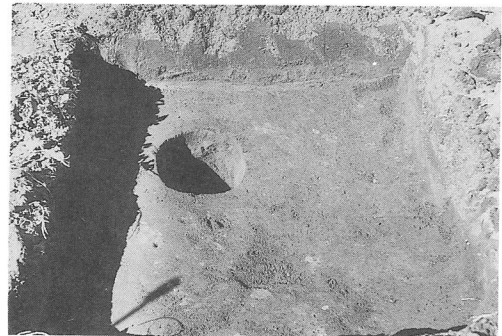
B地区 T-29



B地区 T-49



B地区 T-52



C地区 T-34

昭和62年度農業基盤整備
事業に伴う遺跡調査概要報告書

昭和63年3月31日

発行 宮崎県教育委員会

編集 宮崎県教育庁文化課